



小池辰雄記念図書室だより



小池辰雄
記念図書室

第15号 2013年10月1日

〒264-0025 千葉県千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 4 階
小池辰雄記念図書室 TEL・FAX 043-235-3815

全国の「読む会」からのおたより

再臨の「時」

小池民子（千葉）

以前より、「小池辰雄記念図書室」ができたことや、「小池辰雄を読む会」がある事を聞いておりましたが、やっと何うことができました。

義父である小池辰雄の著書『無者キリスト』はずいぶん前に読んでおりましたが、改めて開いたこの日は、第十転「再臨」の部分でした。水谷先生の詳しいご説明により新たな気づきを与えていただきました。その中で特に再臨の「時」について、頭の中では永遠なる神の時との違いを解ってはいたつもりでしたが、図で示された時、とても立体的にすっきりといたしました。無意識にこの世の時間軸にとらわれていました。ありがとうございました。

読む会終了後、図書室を見学させていただきました。たくさんのドイツ語等の洋書に日本語で大きく題名がラベリングされていて、私のようにドイツ語が全く分からない者にとっても、これはこういう本なのかと興味をそそられる程、良く整理されておりましたので大変嬉しく思いました。天国にいる小池辰雄先生もさぞ喜んでおられることと思います。

皆様に読まれ、愛され、幸せな本たちであると思えます。

たくさんの栄養を補給

柳澤ひかる（ウィーン）

いつも、一時帰国のたびに「小池辰夫を読む会」に出席させていただき、深い恵みと励ましをいただいている。

一年に一回程の参加にもかかわらず、その回ごとの内容が濃く、スツと惹きこまれる。

今回のテーマは「再臨」で、「この世の終末には危機的な状況を迎えるが、それが来る時は神の民に前もって知らされる。終末とは、涙もなく悲しみもない、神が直接ご支配する新天新地への前触れである。」と学び、奮い立つ思いにさせられた。

また、「神の招待に答えているか。天国行きのチケットの予約を取っただけで安心してはいないか。予約を搭乗券に替えるには、この地上で愛する任務の遂行が必要だ。」との水谷先生の問いかけを受け、生活の現場における愛の実践への思いを新たにした。

ハイシーズンの日常・現実が待つウィーンへ発つ前に、たくさんの栄養を補給されて感謝！

小池辰雄を読む会

●余市

2013年10月27日(日)13:30~15:00

2013年11月17日(日)13:30~15:00

2013年12月1日(日)13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●北海道セミナー

2013年11月22日(金)14:00~16:00

余市郡余市町豊丘町 387-1(恵泉ひかり訪問介護ステーション)

*会費:無料(自由献金)

*事前の連絡先:0134-67-9123(山上)

*当日の連絡先:090-8271-3481(山上)

*12月はお休みします。

●帯広

●北見

*しばらくお休みします。

●都賀

2013年10月12日(土)10:00~12:00

2013年11月9日(土)10:00~12:00

2013年12月7日(土)10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5 階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(佐藤)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

●神戸

2013年10月13日(日)14:00~15:30

2013年12月15日(日)14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸バイブルハウス

*会費:500円(自由献金あり)

*連絡先:090-9256-4841(田中)

*隔月開催のため、11月はありません。

*予習不要・初心者歓迎

図書室便りは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。

絶望している人

私が結婚して二年目、吉祥寺の家に両親と暮らしていたのがいけなかったか、どうも結婚生活がうまくいかない。家を出て、自立しなければと決意を固めたとき、「なぜ、一緒に暮らせないのか」といぶかる父親に向かって、「あなたとしては父親になれない。なぜならあなたは父親を五歳で亡くし、父親というイメージをもたずに育ったから、ほんとうの父親を僕に教えることができない」となじったことがある。単に自分の責任を棚に上げての八つ当たりすぎなかったのだが、この一言は父を打ちのめしたらしい。一言も反論せず、口を一文ににして家を出ていく私をだまっておく、しょんぼりした父親を、最近よく思い返す。

しかし、その時はさほど気にも留めていなかった。なにしろ小池辰雄は強く怖い存在で、私の言うことなど「何いっとるか！」の一喝であったから、密かに「やった！」と思いはしたものの、「傷つけた」とはまったく思わなかった。

今思い出してもきわめてイヤな記憶で、父親には気の毒なことを言ってしまった。このような人の気持ちをわからない者を「心の貧しい」人間というのだろう。若輩時の自分を責めることしきりである。そんな心の貧しい者がほんとうに天国に近いのだろうか。

前回の、「幸いなるかな 心の貧しき者 天国はその人のものなり」というマタイ伝のキリストの言葉を内村鑑三の集会で聞いて感銘する辰雄を読みながら、なぜ高校生であった辰雄は、「こころ」は「豊かである」のが正しく、「貧しい」のはいけないことだと疑問を持たなかったのか不思議に思った。「汝の敵を愛せ？ わかんねえー」。日曜日に放映されるNHKの大河ドラマ『八重の桜』で主人公の八重もそういっている。会津戦争で薩長軍と戦って破れた八重(のちの新島襄の妻)にとって、弟をはじめとして身内を殺戮した薩長軍は「敵」であり、恨みこそすれ「愛する」などと教える「耶蘇教」は理解不能の思想である。同じように「心の貧しき者は幸いである」も「わかんねえ」はずだ。

しかし、高校生・辰雄は何の疑問も持たずに受け入れた。なぜか？

この伝記を書きながら、父親の中学時代、高校時代、大学時代は、徹底的に気の弱い、目立たない、引っ込み思案な、それでいてかたくなでくそまじめな少年、あるいは青年像をくりかえし思った。大勢の仲間を引き連れている快男児だった長兄政美にくらべ、辰雄像はいつも隅の方で目立たなくしている存在だったろう。父

の幼友だち、あるいは学生仲間といった友人がうちに訪ねてきたという記憶は一切ない。友だちもいない孤独な青年だったのだろうか。もっと強い人間になりたい、そう思い続けたのだと思う。父は亡く、兄を失い、失明の母をかかえた弱虫の辰雄は、どんなに絶望の日々を送っていたか。

そうか。その「絶望」こそが、「こころの貧しい」状態だったのか。

私が父親をなじった「心の貧しさ」とはどうも違うようだ。「絶望」を心の貧しさというなら、イエスの言葉を理屈抜きに受け入れた辰雄の気持ちも理解できる。言うまでもなくキリスト教は、「思想」ではないのだから、理解、無理解ではなく、「即、信ずる」という世界へ突入したのだろう。

五〇歳を過ぎた頃に辰雄は、キリストのことを「霊の貧者」と言うようになり、「心の貧しき者」という文言も「霊の貧しい者」と訳し直すようになって、私にはますますわけのわからない話となった。「こころ」でも納得しがたかったのに「霊」となるとは手も足も出なかった。

そんな私も七〇歳を過ぎて、ようやく同じ家に生きてきた辰雄という実在の人間の、普通の意味でのさほど「心の豊かな者」ではなかったという姿も理解できるようになった。十代の半ばにして絶望の極みにあった辰雄が、「最も絶望していた者」キリストの「霊の貧者」として神に祈る姿に目を開かれたのもわかってきた。

子である私に対して「強い父親」たらんとした辰雄は、「父親失格」といわれて「弱い父親」をさらけだした。その姿を今思い出して、だからこそ「無者キリスト」を説きつづけたのだと納得する。



強く怖い父であった1958年頃の家族。前列右から信雄、照雄、後列右から清子、順子、辰雄、歌子